

Title	「リベラリズムの出来と陥穽：プラグマティズムにたどりつくまで、そしてその先へ」 谷口隆一郎氏（聖学院大学政治経済学部教授・同学部政治経済学科長・コミュニティ政策学科長）（2015 第 2 回ラインホールド・ニューバー研究会報告）
Author(s)	五十嵐，成見
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.3, 2016.3 :26-27
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5763
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2015 第 2 回ラインホルド・ニーバー研究会報告

「リベラリズムの出来と陥穽ープラグマティズムにたどりつくまで、そしてその先へー」

谷口隆一郎氏（聖学院大学政治経済学部教授・同学部政治経済学科長・コミュニティ政策学科長）



上段_発題者：谷口隆一郎先生

下段_研究代表者：高橋義文先生

2015年12月7日（月）18時～19時半まで、聖学院新館(駒込)2階集会室にて『第2回 ラインホルド・ニーバー研究会』が開催された。今回は、谷口隆一郎氏（聖学院大学政治経済学部教授）より、『リベラリズムの出来と陥穽ープラグマティズムにたどりつくまで、そしてその先へー』と題する講演を伺った。高橋義文氏（聖学院大学総合研究所所長・ラインホルド・ニーバー研究会代表）より、講演者の紹介が行われた。以下は、講演の要約である。

1. 古典的リベラリズムの出来

リベラリズムの形成の歴史は、3つの時代、すなわち、(1) 17～18世紀、(2) 18世紀～19世紀、(3) 19～20世紀、に区分して概観することができる。

(1) 17～18世紀 リベラリズムの原理の形成は、特にT・ホブズとJ・ロックにおいてなされた。ホブズは、自己保存・生存の安全を自然権として措定したが、ロックは、さらに個人の財産の所有権を含めた。これによって近代主義の核心的価値である「個人の富の追求」の萌芽が見出される

こととなった。さらにロックは、政府の主な役割が自然権の保護にあり、信仰等の内面的問題などには介入すべきではないと主張し、国家と宗教の分離を説いた。これにより、内面的自由の保護と寛容という原理が、リベラリズムの伝統の重要な一部となった。

(2) 18世紀～19世紀 A・スミスによって、国家は社会への干渉を避けてむしろ放任すべき、との考えがリベラリズムの原理の一つとして加えられることとなる。この流れはやがて、J・ベンサムによる、自由競争に基づく市場原理の理論的基礎付けへとつながる。ベンサムは、自然法が特権階級の利益擁護のための機能と化していることを批判し、経験的原理に基づいて政治を行うべきことを要求した。こうして、功利を通じた多数者の満足としての幸福の実現こそが正義であるというデモクラシーの理念がリベラリズムに導入された。しかし、J・S・ミルは、ベンサムのように単純にデモクラシーを信頼することはなかった。多数者の意志が少数者の自由を制限・抑圧する危険性を見抜いたからである。

(3) 19～20世紀 ①19世紀末、イギリスでは社会主義運動が活発化ようになる。その状況の中で、放任主義から介入主義への転換が行われ、「集産主義の時代」が到来した。それは、「フェビアン主義」と「ニュー・リベラリズム」を生み出した。前者は、公共の福祉を個人の福祉に優先する社会主義運動である。しかし後者のニュー・リベラリズムの提唱者L・ホブハウスは、フェビアン主義を自由の理念を軽視する官僚的社会主義と断じ、個々人の人格の発展を、より重視すべきことを説いた。両者は、リベラルな福祉国家論に受け継がれていくこととなる。②J・ケインズは、ニュー・リベラリズムの理念を具体的政策へと展開させた。ケインズの経済政策によって、社会主義政策を採用することなく、自由放任主義を放棄することが可能となったのである。③一方、F・

ハイエクは、ケインズの経済政策を「設計主義的合理主義」と呼び、厳しく批判する。ハイエクは、人間行為の複雑な相互作用による、意図せざる結果としての「自生的秩序」(カタクラシー)にこそ、リベラリズムの基礎があると考えた。

2. アメリカにおけるリベラリズム

アメリカは、その建国の歴史からして、生まれながらにしてリベラル社会である。それ故に、アメリカにおけるリベラリズムは多様であり、様々な政治的立場を含有している。しかし、共通項も存在する。それは、政府の干渉を嫌い、個人の自由と機会の平等を強調する個人主義の精神である。19世紀後半になると、産業化が急速に発展し、アメリカ全体に富をもたらした一方、貧富の格差の拡大、独占資本の登場などの社会問題を引き起こした。それらを肯定的に認めたのが、「保守主義」、否定的なのが、「リベラリズム」と呼ばれるようになる。

3. デューイの新生リベラリズムとニーバーのクリスチャン・リアリズム

谷口氏は、新生リベラリストJ・デューイとの思想的論争の文脈の中で、ラインホルド・ニーバーに言及する。デューイは、アメリカの保守主義を批判し、社会問題の解決を要請する。そして、その解決は科学的知識を適用することによって可能と捉えた。ニーバーはこのデューイの合理主義的方法を糾弾する。しかし、谷口氏によれば、ニーバーはデューイを誤解している。デューイは、ニーバーが捉えるような合理主義的理性を承認しているわけではなく、むしろ理性の解釈としては、ニーバー自身の立場に接近している。むしろデューイとニーバーの異なる点は、キリストの贖罪信仰に、現代の社会問題を解決する力はない、とデューイが断じている点である。[ニーバーは、キリストの贖罪信仰が、歴史の問題に対して影響を及ぼすことを見ているからである。]

4. 現代リベラリズムとプラグマティズム

(1) 現代リベラリズムの陥穽 現代リベラリズムは、形而上学的及び宗教的思考を退ける傾向がある。それらの主観を脱却した個人の客観的判断が重んじられるべきと見なす。つまり、道徳的に中立的な正 (the right) が、善 (the good) に先立つべき、というのである。しかし、谷口氏によれば、それは現代リベラリズムが道徳的に破綻していることを意味する。なぜならば、彼らの言う中立な正義は、複雑な近代的個人の善の構想の間で生じる諸問題を解決する道徳的役割を実際には果たしていないからである。実は、彼らのいう中立的な正義というのは、民主主義市民社会の公共文化に既に広く共有されている文化的理念に訴えているに過ぎないのである。

(2) プラグマティックなリベラリズムのその先へ 谷口氏は、以上のように現代リベラリズムの陥穽を指摘し、それを克服するための倫理として「横超の倫理」を提唱する。それは、普遍的原理なるものに解消されたり、あるいは統合されたりする道徳に与することなく、むしろ、自己の道徳を超え出て、他者と連帯する、自己の道徳の境界の解放と拡大を意味する倫理である。それは超越ではなく、横並びの他者への道徳的結びつきを拡大することを志向する倫理である。この横超の倫理は、三つの哲学的主張を妥当化する。すなわち、「倫理的ないし道徳的個別主義」、R・ローティによる「ネオ・プラグマティズム」、R・バーンスタインによる「身を投じた可謬論的多元主義」である。

現代リベラリズムの陥穽を克服する「横超の倫理」の思想は、谷口隆一郎『横超の倫理: ローティ、ハイエク、シンガーを超えて』(春秋社、2014年)に詳細に描かれている。参加者12名。

(文責: 五十嵐 成見 [いからし・なるみ] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)